

「大阪W選」と維新

写真は『ジャーナリスト』733号4月25日。大阪ダブル首長選挙での「大阪維新の会」圧勝について、著書「誰が『橋下徹』をつくったか」で2016年度JCJ賞を受賞したノンフィクションライター松本創さん（元神戸新聞記者）が寄稿している。関心のあるテーマなので、後半を紹介したい。

選挙期間中、両陣営の街頭演説を数カ所ずつ見て回った。“組織動員臭、が拭えない反維新に対し、維新側は無党派層が自然発生的に集まっている印象を受けた。橋下徹氏が率いた3年半前までの「熱狂」とは違う。特別熱心に活動するわけでも、強い政治的志向を持つわけでもない「穏健」な支持層が、着実に積み重なっている感じがあった。

聴衆に話を聞けば、関空の好調、インバウンドの増加、万博招致などを評価する声があった。公園や地下鉄の民営化で街が明るくなったと喜ぶ人もいた。ここには、民主党政権の遺産や前任者から引き継いだ施策も混じっているのだが、まとめて「維新政治の成果」と受け止められていた。

今回の選挙に至る経緯、維新の政治手法、また都構想に首を傾げる声もあるものの、大きな問題とは見ていない。そんな「正しさ」は、いわば「重箱の隅をつつく」批判であり、大事なものは、大阪の景気浮揚と成長、そして都市格の復権なのだろうと、彼らの言葉に感じた。

維新支持の動向を詳細に分析した善教将大・関西学院大学准教授によれば、支持者は維新を〈「大阪」という抽象的な都市空間〉の利益代表者と見ているという。個々人の生活や仕事には直結せず、市や区という狭い意味の地元とも異なる「より集合的な大阪」の利益を彼らは求めている、と。

そして善教氏は、維新支持は決してポピュリズムではないと強調する。自律的かつ合理的に「大阪の代表者」を選択した結果だ、という。

都構想反対の一点で結集した反維新陣営は、どうやって大阪を成長させるかという具体策を提示しきれなかった。有権者に届く言葉を持てなかった。真の敗因はそこにある。今回の圧勝で、都構想住民投票へ向けた動きが加速する。奔流に飲み込まれることなく、冷静に、客観的な事実や問題点を示せるか。維新支持層も含めた有権者に届く言葉を持てるか。反維新陣営にも、在阪メディアにも、そこが問われている。

なぜ脱法的といえる「入れ替えダブル選」に維新が圧勝したか、選挙直後にレポートしたが、どうもすっきりしない。松本さん寄稿などを参考に、さらに考えていきたい。

(2019年5月6日)

